

長崎出島オランダ商館長夫人ティツィアと出島の長椅子

山口美由紀

平成十八年の春、出島に新しく五棟の建物が復元された。その中でひととき大きく目立っている建物が、カピタン部屋。商館長の居室である。カピタン部屋二階では、ある日、ある時のエピソードを主題にし、様々な調度品を展示し、その情景を再現している。その一室十五畳の部屋に、青い貼地の美しい長椅子が置かれている。

この長椅子は、オランダのデン・ハーグに店を構える骨董店『DATSELAAR & GODHELP』で、購入した調度品である。この長椅子には、オランダ商館長プロムホフ夫人ティツィア・ベルフスマの悲しい物語が隠されている。

文化十四年七月四日（二八一七年八月十六日）、三年ぶりに日本に來航してきた二隻の帆船、フラウ・アガタ号とカントン号の入港に、長崎の町は沸きかえっていた。



出島 カピタン部屋 2階

フラウ・アガタ号には、新任の商館長プロムホフが乗船していた。一八〇三年より長らく商館長を勤めたヘンドリック・ドゥーフは、この到着を待ちわびていた。しかし、この船には、出島への滞在が許されない女性や子供、すなわちプロムホフ夫人のティツィアや子供のヨハネスらが乗船していた。このため、すぐには長崎港への入港が許可されず、数日が過ぎ、時の長崎奉行のはからいで、夫人達の出島への上陸が許された。

装飾、家具などに取り入れられ、色は金や赤、黒、青を基調とし、重厚な印象を受ける。

この長椅子の特徴は、青い貼地と金色の鋳、そして獣足を模した脚。平成十七年の夏、展示業務の一環で、オランダ各都市の骨董店を回り、カピタン部屋に飾る調度品の選定、買付けを行っていた時に、この長椅子が見つかった。

選定、購入をまかされた展示の委員を含むチームのメンバーは、前述の川原慶賀の家族図についてよく理解していたため、家具のスタイルと貼地の仕上がりから絵画史料に酷似するこの長椅子の発見を喜んだ。その後、その他の資料と一緒に、この長椅子もオランダから出島に運ばれてきた。

出島滞在中のティツィアは、慣例通り、旧商館長が出島を離れるまでは、新任の商館長が入居する庭園の別荘で暮らした。それから四か月後、出島での貿易を終え、二隻のオランダ船がバタビアに向けて出港する時が家族との最後の別れとなった。

出島を離れた夫人の一行のバタビアまでの船旅は、前商館長ドゥーフと船長ら信頼出来る人物に囲まれての旅で、一月ほどでバタビアに到着した。バタビアからオランダまでの帰路は、四ヶ月以上の船旅となり、デン・ヘルダーの港に到着したときには夫人は憔悴しきっていたという。

その後、ティツィアは、病にかかり、一八二二年の春に亡くなっている。その知らせは、一八二二年の夏に出島を訪れた船によって、夫のプロムホフの元に届けられた。すでに夫人の死より一年以上の歳月が過ぎていたのである。

ティツィアの日本への旅路については、その子孫にあたるルネ・ベルスマ氏が一冊の本にまとめられている。この書籍『ティツィア』は、オランダ語、英語、日本語版（松江万里子訳 シングルカット社 二〇〇三年刊）が作られている。

カピタン部屋二階の十五畳の部屋には、もう一つ、探して欲しい椅子があった。それは同じ川原慶賀の絵画の中にある、赤い礼服のプロムホフが座るラッフルズスタイルの籐製の椅子であった。幸いなことに、こちらも同等品を購入できたので、現在部屋の窓際に展示している。時代を超えて向き合う家族の姿を、この室内の空間に想像していただけると幸いである。

（長崎市教育委員会 出島復元整備室）

然し、上陸については一旦許可されたものの、女性達が出島に滞在することに問題があった。そこでプロムホフ一家は、幕府あてに嘆願書を出すことにした。しかし、結局この嘆願書は認められず、ティツィアとその一行は、オランダ船が十六週間後に、長崎を離れる時帰らされる事になった。この時、長崎を訪れた西洋の女性のことで、長崎の町は大騒ぎとなり、女性達は短い滞在でありながらも、たくさんの絵画に描かれ、又、彼女をモチーフとした古賀人形が作られたことはよく知られている。

なかでも、神戸市立博物館が所蔵する『プロムホフ家族図』には、この家族の姿が詳細に写されている。カピタン部屋の一室で描かれたと推測されるこの絵の中には、時の商館長プロムホフとその夫人ティツィア、男児ヨハネスと乳母ペトロネツラ、召使マラティイが描かれている。この絵画は、出島出入絵師川原慶賀によって描かれたものである。慶賀はこの他にも、出島を訪れたティツィアの姿を数枚描いている。

この家族が置かれていた状況を思いながら絵画史料に向き合うと、そこには、長い航海を乗り越え、出島への女性の上陸が禁じられていることを知りつつやってきたティツィア夫人と、夫人を信頼し、出島の地まで渡ってきた若い女性ペトロネツラ、それにジャワ人の女性マラティイがいる。彼女達の思いとはうらはらに、日本人が初めて見るヨーロッパや東南アジア地域の女性の姿が、長崎の人々にとっては物珍しく、奇異に映り、興味の対象となった。

今回、私達はこの絵画の中で、赤いドレス姿のティツィアが腰掛けている長椅子に酷似した調度品を、オランダのアンティークショップ『DATSELAAR & GODHELP』に見つけた。この店は、十九世紀初期に流行したアンピール様式の調度品をたくさん取り扱っている店である。アンピールとは帝政の意味で、帝政ナポレオン時代にフランスで起こり、デザインは帝政期のローマや古代エジプトの装飾意匠をもとに、直線と厳格なシンメトリーを特徴とする。その意匠は当時の建築や室内

風信

○暦をみたら五月一日は「夏も近づく八十八夜」とあった。そして先輩方が「五月の長崎の楠若葉は日本一だよ」と言われた言葉を思いだし川端の光永寺に行き、それより風頭の楠若葉を見て歩いた。

○ところで、戦後の長崎では五月五日が男の節句である。然し戦前の長崎では六月五日の方が旧暦の五月五日に近いというので六月五日が「男の節句」だったので、男の節句に食べた「カカラ餅」、軒先に搓した「カヤとフツ」、**「唐アク粽」**、「ペーロン」と、全てに初夏の季節行事という感じが多かった。

○次に、長崎の鯉のぼりのあげ方が、他地方のそれとは違っているのにお気づきですか。このような「鯉のぼり」のあげ方は唐船の人達が「唐アク粽」と共に長崎の港に残していったものだと言われている。

○一昨日、旧知の竹之下憲一郎氏来訪、「今年も、越中さん、フェトン号事件より二〇〇年になるのを忘れていないでしょうね」と言われる。

○フェトン号事件とは、文化五年八月十五日（一八〇八）オランダ船以外の入港を認めなかった長崎港に、突然イギリス船が侵入。「無礼の段々これ有り」其の上、水・薪・食料を要求。まんまと出航すると言う事件があった。長崎奉行松平図書頭は立山奉行所内で、英船が去った翌日（十七日）午後その責任をとって割腹。更にこの事の責任は其の年の長崎警備備鍋島藩にも及び家臣は割腹、市民は大混乱となった。松平奉行の墓は大音寺にあり、諏訪神社には康平社として松平奉行が祀られている。

○五月十三日純心大学に新しい博物館と収蔵庫・資料図書研究閲覧室が完成。展示室にはキリシタン関係と長崎美術工芸関係の二部があった。開館記念の特別出品として大幅の圓山応挙・雲竜図、荒木十畝・富岳図、亀山焼染付象・唐菜の酒瓶・長崎青貝細工・ビイドロ細工と各種が特別出展してあった。

○日蘭学会員で長崎出身の松尾龍之介氏、「長崎蘭学の巨人」オランダ通詞志筑忠雄を取りあげ論考を発売されている。其の論考は通詞志筑氏を中心会の人達が推選されておられるように長崎蘭学資料の必読書の一つであると考えている。（弦書告刊、一九〇〇円）

○五月四日長崎九條会主催の第二回「長崎茂木街道を歩く」は、昨年同様参加者も多く盛会であった。

